温州みかん若木の品質向上技術

１．はじめに

近年、異常高温、渇水、成熟期の長雨など極端な気象に遭遇する頻度が増加し、温州みかんでは着色不良・糖度低下・浮皮が問題となっており、特に樹勢の強い若木で品質低下が顕著です。そこで、‘宮川早生’の若木を用い、摘果の時期を変えて強い着果負担を付与した場合の果実品質、翌年の着花などに及ぼす影響を検討しました。

２．試験方法

所内の５年生‘宮川早生’を用い、慣行の摘果として８月摘果区（8 月 12 日に仕上げ摘果）と約１か月摘果時期を遅らせる９月摘果区（9 月 18 日に仕上げ摘果）を設定しました。どちらも粗摘果は行わず、M サイズの果実生産をめざして葉果比約 20 に仕上げ摘果し、経時的に品質などを調査しました。

３．結果

慣行摘果に比べ約１か月摘果を遅らせることで強い着果負担のかかった９月摘果区で、糖度は９月頃から顕著に増加し、成熟期の糖度は 1.2～1.5 度高くなりました（図１）。酸含量、収量に明らかな差はありませんでした。

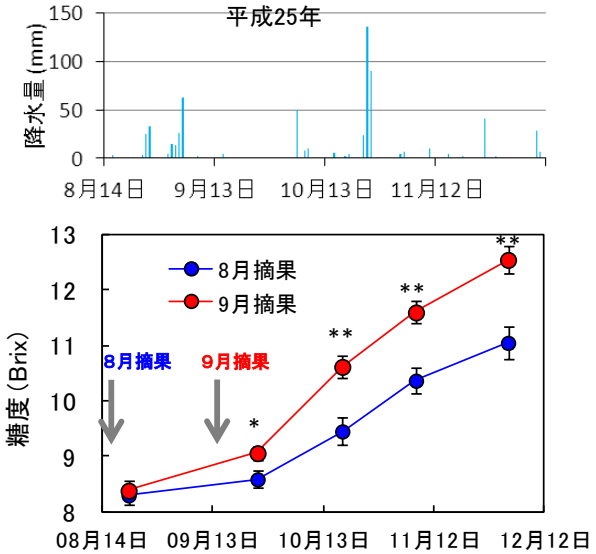

図１　摘果時期と‘宮川早生’の糖度

垂線は標準誤差　*はt-検定の結果5%レベル、**は1%レベルで有意差あり

↓は仕上げ摘果実施日

９月摘果区で、果皮の着色が進み、果皮色（紅）が濃くなりました（写真１）。また、果肉色も早くから濃くなり、果皮・果肉色の濃い果実ほど糖度が高い関係が認められました。

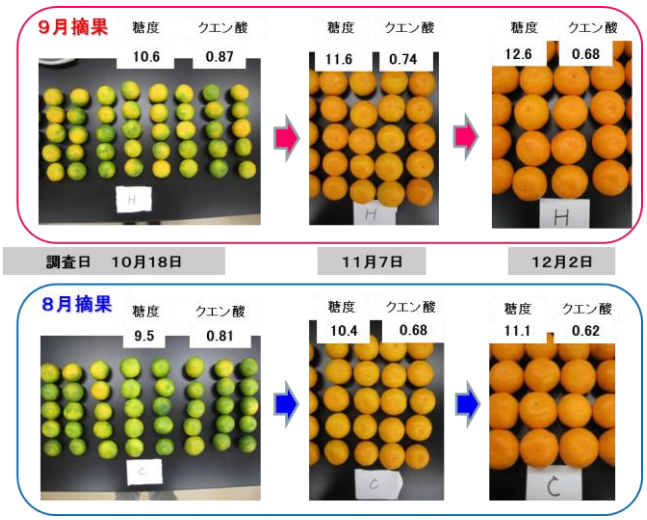

写真１　摘果時期と‘宮川早生’の着色

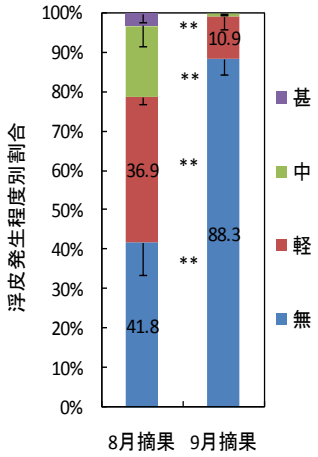

図2　摘果時期と‘宮川早生’の浮皮
調査　12月2日
垂線は標準誤差　**はt-検定の結果1%レベルで有意差あり

浮皮の発生は９月摘果区で抑制されました（図２）。

翌年の着花（果）は、８月摘果区は十分量確認されましたが、９月摘果区も着花は十分で新梢の発生も多く、バランスのよい樹相となりました。

４．技術上の注意点

(1) 着果程度が５段階評価で４～５の着果多樹については、房なり果の変形防止などのため８月に粗摘果として軽く間引きを行った後、９月に仕上げ摘果を実施します。

(2) 耕土の浅い園では、乾燥ストレスがかかり着果負担もより強くかかるので晴天が続く場合には早めに灌水を行います。一方、耕土の深い園では灌水は控えます。

(3) 摘果後に夏秋梢が発生すると糖度上昇は鈍ります。夏秋梢が発生しないように枝先端部や表層の大きい果実はできるだけ落とさずに着果させておき、10 月の樹上選果で除きます。

（みかん研究所　室長　井上久雄）